

2018年8月30日開催
大学経営支援事業プログラム説明会 特別講演
中央大学 学事部 学事企画課 副課長 石井 富江 氏

「自己点検・評価から大学マネジメントへ ～中央大学の取組み」 講演要旨録

中央大学における自己点検・評価活動の仕組みと、自己点検・評価を起点にいかに関学を動かしていくか、現在取り組まれている一端について、中央大学 石井様にご講演いただきました。

・中央大学で自己点検・評価活動の仕組みを構築したのは2007年度である。第一サイクルの機関別認証評価を2009年度に受審することに対応するためのものであり、まずは「自己点検・評価活動の定着」を図ることが主眼だった。その後、認証評価の第二サイクルに対応する形で、2013年度に実施大綱の刷新、外部評価の開始など大幅な見直しを行い、「内部質保証システムの構築」をはかった。2016年度の機関別認証評価受審を経て、2018年度からは「着実かつ円滑な改善・向上を促進する点検・評価」活動を目指し、毎年行う自己点検・評価活動の実施方法を刷新している。

・直近の2016年度機関別認証評価結果では、「内部質保証」において「大学評価推進委員会」「組織別評価委員会」「分野系評価委員会」の3委員会が密接な連絡・活動を行うなど、

自己点検・評価を基盤とする内部質保証システムが構築され、機能している点が「長所として特記すべき事項」として高く評価された。



・大学マネジメントとの連動については、前年度の自己点検・評価結果で明らかとなった全学として取り組むべき最重要課題や学生アンケートの結果について、中長期事業計画に基づく単年度の事業計画や、各組織

が作成する次年度のアクションプランに反映させる仕組みを有しているが、運用面では課題も有している。

・自己点検・評価制度、認証評価制度は、事後チェックを目的に導入されたものである。これらを大学の改善・改革につながる有益な機会として活用するためには、新たな価値を創出するイノベーションにつなげ、大学を動かしていく契機としていかに活用していくかが重要である。そのためには、仕組みだけに頼らず、現場レベルとの連動が大切であるとの認識のもと、日々取り組んでいる。

具体的な取組みとしては、①年次自己点検・評価レポートのフィードバックを通じた現場との課題共有ならびにプロジェクト意識・評価マインドの涵養、②教職員だけでなく学生も巻き込んだ学生アンケート結果の情報発信・共有、③外部評価委員会の活動を通じた大学執行部の意識改革、④全学内部質保証組織としての大学評価委員会の活性化があげられる。

・自己点検・評価はあくまでも大学の現状を把握するにあたっての共通言語、課題共有の起点であり、そこから大学マネジメントがスタートするというのが、これまでの活動を通じて強く認識した事項である。自己点検・評価、認証評価の担当部門が心がけるべき姿勢は、単に仕組み・システムを導入するだけでなく、大学現場の実情に沿った人的コミュニケーションや企画提案を行うなど、日常から相互の信頼関係を構築しつつ、大学外部からの情報も有効に活用しながら自学マネジメントをより良い方向に向かわせる事である。「法令義務だから」「認証評価だから」「委員会で決まったことだから」と言うだけでは大学は動かさない。経営と現場から信頼される支援部隊を目指すべきだ。

・中央大学では、自己点検・評価活動にあたり、日本能率協会の「JMA 自己点検・評価マネジメントシステム」を導入している。学内資料、基礎データを Web 上で格納でき、全学教職員が、いつでもどこでも編集・閲覧・出力できるメリットがある。認証評価の際に必要なデータ作成や根拠資料の整備作業において効率化・省力化ができた実感している。学内資料では、学生アンケート結果、集計表、外部評価委員会の報告書、記録類等も全て格納でき、自己点検・評価活動のエビデンス収集や課題整理をする時にも役立ちそうな資料を集めて運用することができる。

「JMA自己点検・評価マネジメントシステム」とは？

- 1) 自己点検・評価に必要な様々な指標・データ、報告書などを一元管理し、全職員で活用できます。
- 2) 年度計画の進捗管理や年度評価の基礎データとして活用できます。
- 3) ステークホルダー（学生、企業、教職員等）満足度、意識調査やアカウンタビリティのデータとして活用できます。

<本インタビューの内容に関するお問合せ>
一般社団法人日本能率協会 学校経営支援センター
TEL 03 - 3434 - 6617
<http://www.jma.or.jp/edu/school/>